
プロジェクト報告

「近代日中密教交流の研究」の報告書

陳 継 東

本プロジェクトは近代日中仏教者の接触と交流に関するシンポジウムを開催するものである。具体的には、2024年2月6日に、中国や日本の四名の学者が本学で集まって、それぞれの研究に基づき、真言密教を学ぶために高野山に留学した中国僧侶の滞在記録および、中国仏教の現状を調査・視察した日本仏教者の旅行記について報告した。それによって日中仏教者の間における自己と他者の認識の形成およびその認識を生み出す知の枠組みを探究し、かかる研究分野に新たな貢献を目指した。

まず、高野山大学密教文化研究所研究員の徐東軍（来海）は「近代中国密教における持松法師の「賢密思想」—唐代密教の教理形成の研究におけるその思想的価値をめぐって」というテーマで発表した。

中国で失われた密教が近代日本から中国へ還流する際に、東密（空海の密教）の教判思想が中国の顕密融合という思想環境に適応できない問題が生じてきた。このため、空海の密教の逆輸入に対して、二つの真っ向から対立する受容態度が現れた。王弘願（1876-1937）一派の全般継承という態度、太虚（1890-1947）一派の、顕密の教学体系を融合するうえで、チベット仏教（密教）を参考として、新たな「中密＝中国密教」を樹立すべきだという主張、さらに持松（1894-1972）は華嚴教学をベースにして密教の理論を再解釈し、独自の「賢密思想」を打ち出していく。本論文は、持松の「賢密思想」を明らかにするもので、持松と近代華嚴学展開および『賢密教衡』、『密教通関』という持松の著書を通じて考察した。

中国社会科学院世界宗教研究所助教の趙新玲は、「近代中国東北における日本密教布教活動の考察」というテーマで発表した。

明治二七（1894）年から明治二八（1895）年にかけて起こった日清戦争は、日本が近代において初めて経験した対外戦争である。その時期に、真言宗と天台宗の教団が戦争に対して如何なる動きや対応をみせたか、その全体像の究明を追求した。また、日清戦

争から日露戦争をへて、満州国までの中国東北地方における日本真言宗の宗教活動を考察し、多くの新史料と出来事を掘り起こして、今までの研究で見逃されている事実を明らかにした。

國學院大学神道文化学部准教授のエリック・シッケタンツは、「親善と地政学：近代華北地域における日中密教ネットワーク」というテーマで発表した。

1932年11月26日の午後、天津の日本租界にある明石街のある建物の三階において、中日密教研究会という仏教組織の天津支部の開会式が執り行われた。記念すべき式典ということもあり、会には七十人余りの人々が参加した。式場となった部屋には、日本真言宗の開祖弘法大師と不動明王の霊画を中央に、その左右に金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅が設備されていた。集まった人の中には複数の天津在住の日本人実業者たちのほかに、天津総領事桑島主計、天津日本居留民団行政委員会会長上野寿、支那駐屯軍の波多野大佐、北洋政府時代の政治家の王揖唐、高凌慰と孫潤宇、そしてパンチェン・ラマ9世使節（喝言文と各方面から届いた祝辞が朗読された。この様子を新聞報道では「入り交ぜる西藏音支那音、日本音は人々に異様の感を与へ」たと表現している。1931年に発生した満州事変が国際連盟で議論されているただなかにあり、かつ天津第一・第二事変が起きた直後という複雑な日中関係を背景として考えた時、「中日官民が一堂に会して共に報恩道を歩み怨心を摧破」したことは参加者にも奇跡のように感じられた。

本報告はこの中日密教研究会の成立、盛衰の経緯、そして中日密教研究会に参加していた会員の目的と思想背景を分析したものである。これによって、日中対立が激化する1930年代の華北において、宗教という新しい観点から日本人と中国人の交流を考察することが可能となると指摘した。考察のなかではアジア主義が重要なキーワードとなる。近年の嵯峨隆の研究が示すように、従来の日本側からの考察を踏まえた上で、アジア主義を中国側からも検討する余地がまだ残っている。中日密教研究会は、アジア主義という思想的な空間における中国人と日本人の交流を考察するためのよいケーススタディといえる。

青山学院大学国際政治経済学部教授の陳継東は、『『日本仏教徒訪華要録』における真言宗僧の中国仏教の認識』というテーマで発表した。

近代における日中仏教交流史の研究は、これまで浄土真宗と中国仏教の關係に偏っており、他の日本仏教の宗派と中国仏教や社会との関わりについての研究は非常に少ない。実際には、1910年代以降、最も頻繁かつ実質的な影響を持ったのは密教であった。これには二つの理由がある。一つは、密教は中国では明代以降禁止されていたが、清末には密教の典籍が再び求められ、その歴史が復興されつつあったこと。もう一つは、日本の

密教が中国仏教との接触を始め、中国の僧侶が日本に渡り密教を学び、それを中国に持ち帰って復興させたことである。

このような歴史的背景の下、日中仏教の交流は人々の往来がますます活発になった。1926年10月1日から31日にかけて、22名からなる日本仏教代表団が東京から船で出発し、釜山、京城（現ソウル）を経由して奉天（現瀋陽）に入り、そこから北京へ向かい、南下して天津、南京、鎮江、蘇州、上海、寧波、杭州を訪問した。代表団は29日に上海を出発し長崎に戻った。訪問先では、すべての場所で中国側から「熱誠な歓迎」と「懇切な接待」を受け、当時の高僧や名士、団体と会見した。この訪問の詳細は『日本仏教徒訪華要録』（1928）に記されており、訪問日程の記録だけでなく、第二部には「団員視察報告集」が収録されている。この報告集では、各宗派の教育機関の校長や大学教授、寺院の住職などが、それぞれの立場から中国仏教の現状に対する印象や認識を記録している。多くの場合、中国仏教に対して善意をもって理解し、日中協力の願望を表明しているが、中日仏教の差異や中国仏教の後進性を暗示する意見も多く見られる。

その中で、真言宗の代表は六名であり、古義真言宗、真言宗総本山金剛峰寺前執行湯崎弘雄、京都大学前教授佐伯恵眼、高野山大学教授金山穆韶、新義真言宗智山派宗務所教学部長文屋教晋、私立大学勸学教授高井観海、新義真言宗豊山派前宗務長丹生屋隆道が含まれていた。本稿では、これらの日本真言宗代表が中国仏教の歴史と現状についてどのように認識していたか、日本密教の中国での伝道の可能性、および中国仏教発展への示唆について考察した。

京都大学教授の佐伯恵眼と高野山大学教授の金山穆韶の見解は非常に代表的である。佐伯恵眼は、日中仏教の間に戒律上の隔たりが存在し、それが両国仏教の協力を妨げていると指摘した。しかし、相互に親しくなることで、中国の仏教徒は次第に日本仏教の「発展の道とその精神」を理解するようになり、このような隔たりは自然と解消されるだろうとも述べている。彼はまた、中国仏教の現行の法式儀軌の中に密教の影響や痕跡があるものの、純粋な密教を保持している寺院は存在しないと指摘した。しかし、近年高野山から僧侶が北京に留学し、また中国からも高野山に留学生が派遣されていることから、このような交流を通じて「密教が中国で復興する可能性」があると期待を寄せている。

一方で、高野山大学教授の金山穆韶は、密教の中国での復興問題について具体的な感想を述べている。彼は、宋代以降、禪と浄土の両修思想が各宗派に浸透しており、これらの仏教は清末に至るまで衰退していたが、近年復興の兆しを見せていると述べた。特に、密教は楊仁山の提唱や彼の弟子である桂伯華が日本に渡ったこと、さらに王宏願や太虚法師の弟子である大勇法師、顕蔭法師らが高野山に留学したことによって、密教復

興の機運が生じているが、現在はまだ中国密教復興の準備期であり、日本の密教徒は「最善を尽くして指導し、支援する必要がある」と強調している。また、金山は中国仏教の禪淨兼修の状態が、一つの寺院に禪堂と念仏堂が共存し、自心淨土と西方淨土が対立する修行形式を生んでいるとし、この混乱を解決し、「禪と念仏、主観的教えと客観的教えを統合できるのは、真言密教しかない」と述べている。これらの中国仏教に対する観察と認識は、日中仏教間の違いを示すだけでなく、中国仏教の後進性と日本仏教の指導的立場を意識させるものとなっている。

密教が近代中国で復興したことには、日本真言宗の影響が深く関わっている。今回の研究プロジェクトは、本格的な研究の準備段階に過ぎず、今後も資料発掘や人的交流、思想分析の面でさらなる進展が期待される。